

ニーチェ『道徳の系譜学』における「無への意志」の階層性と両義性について

松田愛

Zur Sich-vervielfachung und Zweideutigkeit des „Willens zum Nichts“

in *Zur Genealogie der Moral*

Ai MATSUDA

Friedrich Nietzsche (1844-1900) ist bekannt für sein Wort »Gott ist todt« und seinen Nihilismus. In *Zur Genealogie der Moral* (1887) nennt er den Nihilismus „Willen zum Nichts“. Die Aufgabe dieses Aufsatzes liegt darin, den „Willen zum Nichts“ in *Zur Genealogie der Moral* zu betrachten.

Nietzsche definierte den „Willen zum Nichts“ nicht in *Zur Genealogie der Moral*. Aber die Genealogie beginnt mit einer Einsicht über die Gefahr vom „Nichts“. Und sie endet mit dem Satz: „lieber will noch der Mensch das Nichts wollen, als nicht wollen“ (ZGM : 3/28). Deshalb muss die Genealogie der Moral auch als die Genealogie des „Willens zum Nichts“ verstanden werden. Mit solchem Verständnis kann die fundamentale Struktur des Nihilismus ins Klare gebracht werden. Sie ist wie folgt.

Der „Wille zum Nichts“ enthält drei Stufen. Die erste Stufe des „Willens zum Nichts“ ist der religiöse Glaube. Die zweite Stufe ist der wissenschaftliche Wille zur Wahrheit. Nach Nietzsches Meinung sind sowohl der religiöse Gott als auch die wissenschaftliche Wahrheit ein Nein-sagen zum Leben. Jedoch das wissenschaftliche Nein-sagen verneint das religiöse Nein-sagen. Hier vervielfacht sich das Nein und wird viel tiefgründiger. Nietzsche denkt, dass weiterhin der wissenschaftliche Wille zur Wahrheit sich überwinden muss. Das Motiv dieses Aktes ist die negative Funktion des „Willens zum Nichts“. Also die dritte Stufe des „Willens zum Nichts“ ist der Wille zur Wahrheit, der sich selbst kritisiert.

An dieser Selbstkritik des Willens zur Wahrheit kommt die größte Gefahr. Diese Gefahr ist die Unmöglichkeit von der Enthaltung des Willens. Da diese Selbstkritik notwendig ist, ist diese Gefahr unvermeidlich.

An dieser Selbstkritik des Willens zur Wahrheit entsteht auch die Möglichkeit auf das Auftreten des Starken, der das Leben unmittelbar bejaht.

Nur der „Wille zum Nichts“ als der Wille zur Wahrheit kann den „Willen zum Nichts“ verneinen und kritisieren. Und weil der „Wille zum Nichts“ weiß, dass es kein Ziel gibt, bejaht er das Ja-sagen des Starken. Hier vervielfacht sich das Ja-sagen zum Leben. Also der „Wille zum Nichts“ ist nicht nur negativ, sondern auch positiv zu interpretieren. Der „Wille zum Nichts“ umfasst daher die Sich-vervielfachung und die Zweideutigkeit.

目次

はじめに

第一章 「無への意志」の「系譜学」

第一節 「系譜学」の起点

第二節 「無への意志」の言及方法

第三節 「無への意志」の終点

第二章 何が「無への意志」と呼ばれるのか

第一節 キリスト教の「神」への信仰の生否定

第二節 科学的「真理への意志」の生否定

第三節 自己否定による自己肯定という逆説

第三章 「無への意志」の階層性

第一節 メタ的生否定の構造

第二節 「無への意志」の三段階

第四章 「無への意志」の両義性

第一節 「危険」と「希望」

第二節 「自殺的ニヒリズム」

第三節 「真理への意志」の「自己止揚」とメタ的生肯定

終わりに

凡例

注

はじめに

本論文の課題は、ニーチェ（1844-1900年）の『道徳の系譜学（*Zur Genealogie der Moral*）』（1887年執筆・出版）における「無への意志（*Wille zum Nichts*）」¹を解明することである。『道徳の系譜学』では、「無への意志」という語はニヒリズムという語と並置され、ニヒリズムのことを指し示している。従来の研究では、ニーチェのニヒリズム思想を明らかにするためには、『道徳の系譜学』よりも遺稿断片が重視されてきた²。たしかに、『道徳の系譜学』では「無への意志」そのものの主題的分析が展開されているわけではない。しかし、そこではやはり、「無への意志」という語によってニヒリズムが思惟されていることは間違いない。本論文での検討を通して明らかとなるように、「道徳の系譜学」全体を通して「無への意志」の全体像が浮かび上がるのである。したがって、『道徳の系譜学』における「無への意志」を解明することができれば、ニーチェのニヒリズム概念を明らかにすることができる。

本論文は次のように進む。第一章では、「道徳の系譜学」は「無への意志＝ニヒリズム」の「系譜学」であることを明らかにする。それによって「無への意志＝ニヒリズム」を『道徳の系譜学』に内在的に考察することの妥当性が示されるだろう。第二章では、キリスト教の「神」と科学的「真理」の生否定性が「無」と呼ばれていることを確認し、「無への意志」は自己否定が自己肯定を意味するという逆説性を表現する定式であることを明らかにする。第三章では、「無への意志」は否定を介してメタ化する構造を持ち、三つの段階に階層化されること、それは「無への意志」の自己言及的な否定の働きを契機とする「自己超克」であることを明らかにする。第四章では、「無への意志」の階層化が必然的であるがゆえに、「自殺的ニヒリズム」の「危険」は「不可避的」であること、それは同時に、生の直接的肯定の可能性とメタ的生肯定への転換の可能性を意味することを明らかにする。それにより「無への意志」は両義的³であることが示される。以上から、「道徳の系譜学」における「無への意志」はニーチェの「ニヒリズム」の基本構造を指し示していること、したがって「無への意志」はニーチェ哲学における主要術語であることを結論する⁴。

第一章 「無への意志」の「系譜学」

第一節 「系譜学」の起点

『道徳の系譜学』における「無への意志」を解明するに当たり、まず、「道徳の系譜学」と「無への意志」との関係を整理しておきたい。それは、「道徳の系譜学」の目的や背景的な問題意識から明らかとなる。ニーチェは予め序言で、『道徳の系譜学』の目的は「道徳的諸価値の価値を問うこと」であると説明している（ZGM: Vorrede/6）。そして、この目的のためには道徳的諸価値の発生や発展にまつわる諸条件を検討することが必要であると主張する（ibid.）。かくして、「道徳の系譜学」が行われることになるのだが、そこには、道徳の価値に対するニーチェの次のような疑念があることに注意したい。

とくに問題なのは、「非利己的なもの」の価値、同情・自己否定・自己犠牲の本能の価値であった〔……〕。まさにここ〔＝同情・自己否定・自己犠牲の本能〕にこそ、私は人類の大なる危険を、すなわち、人類が最も崇高におびき寄せられ誘惑されるのを見た。——しかし、どこへ？無の中へ？——まさにここにこそ、私は終末の始まり、立ち止まり、振り返る疲労、生に反抗する意志、優しく憂鬱に現われる最後の病気を見た。つまり私は、ますます広がりつつあり哲学者すらも捉え病気にした同情道徳を、われわれの不気味になったヨーロッパ文化の最も不気味な症候であると、一つの新しい仏教？への、一つのヨーロッパ仏教？への——ニヒリズム？への迂回路であると理解した…（ZGM: Vorrede/5, KSA: 5/252）

この箇所、ニーチェは「系譜学」を遂行する自らの問題意識を要約している。その問題意識とは、「無」であり、それは生にとっての「終末」である。そして、「無」へと至ろうとすることはニヒリズムとも言われている。そしてこの箇所から、「無」へ至ろうとするニヒリズムは、まずニーチェの同時代、すなわち「近代精神」の内に見出されていることが分かる。つまり、「無」へ至ろうとするニヒリズムの「危険」を見出すからこそ、道徳の「系譜学」の必要性が生じているのである。つまり、「無」の「危険」の問題意識こそが、ニーチェの「系譜学」の起点である。

第二節 「無への意志」の言及方法

実際に「系譜学」本体において「無への意志」がどのように語られるのかを確認しておこう。「系譜学」は、第一論文「善と悪」、「よいとわるい」⁵、第二論文「負い目」、「疾しい良心」、その他」、第三論文「禁欲的理想は何を意味するか？」という三つの論文から構成されている。そして、一貫して、道徳的諸価値の価値が「生の成長を促すか阻

害するか」という観点から判断され⁶、道徳は生にとっての「危険」であることが確認されている。

「系譜学」本体においても、「無への意志」はニヒリズムと言い換え可能な語として用いられる。ニヒリズム・ニヒリズム的という語の前後に「無への意志」や「無への欲求」という語が置かれて言い換えられたり（ZGM: 2/21, 2/24, 3/14）、「無への意志」という語がなくても「無」がニヒリズムと結び付けられたりしている（ZGM: 3/26, 3/28）。

「無」や「無への意志」という語の使用は、第一・第二・第三の各論文に見られるが、これらの言及箇所に通ずるのは、「「無への意志」とは……である」という仕方ではなくて、「……は「無への意志」である」という仕方、時折「無への意志」という語が用いられるということである⁷。また、ニヒリズム・ニヒリズム的・ニヒリストという語が「無」や「無への意志」という言葉なしに単独で用いられる場合もあるが、そこでも同様である（ZGM: 1/12, 3/4, 3/24, 3/26, 3/28）。

ニーチェが「道徳の系譜学」で取り上げる「道徳」とは、単に「他者を害するなかれ」というような規範のことだけではない。宗教が道徳の起源として、また科学⁸も道徳的なものとして批判⁹され、「無への意志」と関連付けられる。また、未来に生じるであろう「最大の危険」としても「無への意志＝ニヒリズム」が言及される。「系譜学」の議論は、第一・第二論文が第三論文の議論に結びつく形で、最終的に従来の理想はすべて「無への意志＝ニヒリズム」であったとまとめられている。したがって、「道徳の系譜学」は、実質的に言えば、「無への意志＝ニヒリズム」の「系譜学」である、と言える¹⁰。

第三節 「無への意志」の終点

「道徳の系譜学」は「欲しないことを欲するよりはむしろまだしも無を欲することを欲する」という言葉で終わり、これは「無への意志」のことである。このように、「道徳の系譜学」は一貫して「無への意志＝ニヒリズム」の問題と関わっている。ただし、ニーチェは「道徳の系譜学」においてニヒリズムの根本的分析を意図していたわけではない。

私によってここで明らかにされるはずのものとは、この理想〔＝禁欲的理想〕が何を引き起こしたのかということではない。むしろ、全くただ、それが何を意味しているのかということ〔……〕だけである。（ZGM: 3/23, KSA: 5/395）

あの事柄〔＝近代精神の奇妙で複雑な諸々の事柄〕について、私は、別の連関

においてより根本的かつより厳格に取り扱う手はずになっている(「ヨーロッパのニヒリズムの歴史について」という標題の下で。これについては、私が準備している著作、すなわち『力への意志、あらゆる価値の価値転換の試み』を挙げておく)。 (ZGM : 3/27, KSA : 5/408-409)

当時ニヒリズムという言葉は新しいものではなかった¹¹ことを考えると、ニーチェが取り立てて説明なしにニヒリズムという語を持ち出すのは (ZGM : 2/12, 3/4, 3/24, 3/26, 3/28)、自分の問題意識が当時のニヒリズムについてのものであることを含意していると考えられる。ニーチェによれば、「無」の「危険」を孕んだ当時の具体的なニヒリズムの「症候」そのものを批判的に取り上げて「より根本的かつより厳格」な分析を行うのは別の著作の予定であった¹²。「道德の系譜学」の目的は道德的諸価値の価値を問うことであり、その結論が「無への意志」であり、それは「無」という「終末」の「危険」をもたらすという価値を持っていることを意味している。したがって『道德の系譜学』で行われるのは、「無への意志=ニヒリズム」の「系譜」を描き出すことまでである。

したがって、「無への意志」とは何かを理解するためには、何が「無への意志」と呼ばれるのかという点を踏まえつつ、さらに踏み込んで「系譜学」の議論の全体から「無への意志」を浮かび上がらせねばならない。そこで、本論文では、まず第二章で、何が「無への意志」と呼ばれるのかを確認し、それを踏まえて、第三章では「無への意志」の系譜学という観点から『道德の系譜学』の議論を再構成する。

第二章 何が「無への意志」と呼ばれるのか

第一節 キリスト教の「神」への信仰の生否定

ニーチェは、キリスト教の「神」と仏教の「無」とを同等視し、キリスト教の「神」を「無」と呼ぶ。

神との神秘的合一 (unio mystica) への欲求 (Verlangen) は仏教徒の無へ、すなわち涅槃 (Nirvāna) へと没入することの欲求である。(ZGM : 1/6, KSA : 5/266)

ニーチェは仏教的「無」の概念の内実を踏まえて、それと同じ概念をキリスト教の内に見出しているわけではない。「神」と「無」との同等視は、宗教はいずれにせよ生の苦しみからの解放を求めるものであるという極めて一般的な観点¹³を表現しているに過ぎない。つまり、ニーチェが「無」として理解しているのは、苦悩を感じなくなった状態としての「無」である。

催眠的な無 - 感情 (Nichts-Gefühl)、最も深い眠りの安息、要するに苦しみの無いこと——これが苦悩する者と根本的に不調な者たちにとっては、すでに最高の善、価値の価値と看做されてしかるべきものであり、これは彼らによって、積極的であると評価され、積極的なものそのものであると感じられねばならない。(感情の同じ論理によって、あらゆるペシミスティックな宗教においては無が神と呼ばれる。) (ZGM: 3/17, KSA: 5/382)

このように「神＝無」とは苦しみの無さのことを指して言われているが、ニーチェによれば、その苦しみの無さの実質は禁欲的催眠感情である¹⁴。禁欲はあらゆる欲求を禁じ、断食などの苦行を通して生存のための基本的欲求を極限まで禁ずる。例えば、食欲を禁ずることは生を否定することに等しい。すなわち、ニーチェの言う「神＝無」は、生きているという状態の最も消極的あり方としての「無」であり、此の現実の生に対する否定である (ZGM: 3/11)。

こうした生否定的なキリスト教の「神」概念は、道徳的な「善」/「悪」という価値判断と結び付いている。ニーチェは、「善」/「悪」という価値判断は「ルサンチマン (Ressentiment)」による他者に対する否定から生じる、と考える (ZGM: 1/10)。「ルサンチマン」とは「弱者」の「強者」に対する憎悪や復讐欲の蓄積である。生に属する欲望を満たす「強者」は「弱者」を侵害するがゆえに「悪」として否定される。

また、ニーチェは、ルサンチマンが他者ではなく自己に向け変えられることによって、人間の生は、禁止し監視しなければ「悪」を犯すもの、潜在的な「悪」と看做され、「良心」の限りなく厳しい審問の下にさらされるようになったと考える。そのような「負い目」の感情の内に、ニーチェは「生存の無価値化」を見て取り、それを「生存からのニヒリズム的逃避、無への欲求、もしくは生存の「反対物」への、別個の生存への要求、仏教やその類のもの」と呼ぶ (ZGM: 2/21)。また、「諸々の力 - 複合体の闘い」を否定し平等を実現することを目指すならば、それは「人間の未来の暗殺計画、疲労の一つの徴、無への一つの抜け道」である、とニーチェは言う (ZGM: 2/11)。

以上のように、ニーチェはキリスト教の「神＝善それ自体＝正義＝真理」という肯定的概念の生否定性を指摘する。これにより、東洋のみならず西洋においても、生否定が生存肯定を、消極的なものが積極的なものを意味してきたことが明らかとなった。

第二節 科学的「真理への意志」の生否定

ニーチェによれば科学も宗教と同様に禁欲的であり、生否定的である。それゆえ、宗教と科学は一括して「無への意志」と呼ばれる（ZGM: 3/28）。

尤も、宗教的な事柄から距離を取ろうとする意識、無神論的傾向が、近代の科学（Wissenschaft）の特徴であることは、ニーチェも認めている（ZGM: 3/23-26, JGB: 3/58）。しかし、ニーチェによれば、両者の対立は見かけでしかない。「なぜなら、彼ら〔＝無神論者、反キリスト者、非道徳家、ニヒリストたち〕はいまだ真理を信じているからだ」とニーチェは言う。そして、ニーチェは、「真理」は「神」と同じく「形而上学的」概念であると言う（ZGM: 3/24）。その議論の要旨は以下の通りである。

例えば、太陽が地球の周りを回っているように見えようとも、そのままを信じることは間違いである。肉体的感覚的に捉えられたものは疑うべきであり、自然的な生の条件下では「真理」を捉えようと欲しても人間は間違いを犯しやすい。人間は確実なものでも正しいものでもなく、疑わしいものであり、そのような確実でないものは科学的「真理への意志」にとって信じるに値しないものであり価値の低いものである。このように、ニーチェは、科学的「真理」概念が宗教的「神」概念と等しく生否定的であることを明らかにする。そして、その生否定を宗教的信仰の場合と同様に、「無」と呼ぶ。

コペルニクス以来人間は斜面に落ち込んだように思われる。——人間は今やますます速く中心点から転がり落ちる——どこへ？無の中へ？「刺し抜くような自己の無の感情」の中へ？（ZGM: 3/25, KSA: 5/404）

人間が一種の動物として扱われ、宇宙の中心ではなく太陽の周りを回る一惑星の住人として自己認識することは、人間が人間であることに何ら特別な意味も価値も認めないということである（ZGM: 3/25）。

第三節 自己否定による自己肯定という逆説

以上のように、宗教的禁欲は、力の源泉を塞ぐことが力の発揮を意味し、苦しめることが苦しみからの解放を意味し、終末を欲することが生存の維持を帰結する。科学的禁欲は、「真理」を求める自己に誠実であろうとして、疑わしいものを「真理」とは認めないところに、科学の自負の拠り所がある（ZGM：3/25）。これは、真理欲求を満たさないことが最も真理に近づくことを意味する、ということである。

このように、宗教的信仰も科学的「真理への意志」も、生を否定的に評価し、自己が欲望のままに振る舞うことのないように、自己は常に自己自身を「良心」の審問にかけ、自己を否定的に規定する。それが、宗教的人間・科学的人間の生存（Dasein）の意味（Sinn）となり、自己が肯定される¹⁵。ニーチェは、このように自己を否定的に規定することによる自己肯定を「逆説」¹⁶的と呼ぶとともに、「無への意志」と呼ぶ。

ニーチェによれば、このような禁欲の生否定性の根本には、自己の生存を維持・肯定するための「必要性（Necessität）」がある（ZGM：3/11）¹⁷。また、「無への意志」は「欲しないことを欲するよりはむしろまだしも無を欲することを欲する」ことであると定式化され（ZGM：3/28）、意志の維持を含意している（ibid.）。

禁欲的理想から方向を得た意欲全体が何を表現しているのかは、全く隠しようがない。すなわち、人間的なものに対する、そればかりか動物的なものに対する、そればかりか物質的なものに対するこの憎悪、感性に対する、理性にさえも対するこの嫌悪、幸福と美に対するこの恐れ、あらゆる仮象・変転・生成・死・願望・欲求からでさえも逃れようとするこの欲求——これらすべては、敢えて把握しようとするれば、無への意志、生に対する嫌悪、生の最も基本的な前提に対する反抗を意味するが、しかしそれはあくまでも一つの意志である！... そしてはじめに言ったことを最後になお言うとするれば、人間は欲しないことを欲するよりはむしろまだしも無を欲することを欲する...（ZGM：3/28, KSA：5/412）

以上より、「無への意志」は、具体的には、宗教的信仰と科学的「真理への意志」であり、形式的には、自己否定による自己肯定の逆説性を表現する定式である、と結論できる。これを踏まえて、次章では、「系譜学」を「無への意志」の「系譜学」として再構成する。

第三章 「無への意志」の階層性

第一節 メタ的生否定の構造

「無への意志」は、それを否定しさえすれば回避できるわけではない。何よりもまず、キリスト教道徳を生否定的であると批判し否定的に評価するニーチェ自身が、「無への意志＝ニヒリズム」を避けることはできない。「善」/「悪」の価値判断によって他なる「強者」を否定する「弱者」に対する厳しい批判は「吐き気 (Ekel)」という言葉で表現されるが (ZGM: 1/11, 3/14, 3/19)、その「吐き気」は、ニーチェによればニヒリズムである (ZGM: 1/12)。というのも、「弱者＝善人」に「吐き気」を催す者は、人間の「弱化＝善化」を見て、人間というものに苦悩し人間に対する期待と意志を喪失するからである (ZGM: 1/11-12)。

ヨーロッパの人間の卑小化と平均化は、われわれの最大の危険を伴っている。というのもこの光景は見る者を倦み疲れさせるがゆえに... [……] 人間の光景は今や見る者を倦み疲れさせる——これがニヒリズムでないならば、今日ニヒリズムとは何であるか？... われわれは人間に倦み疲れている... (ZGM: 1/12, KSA: 5/278)

そこにあって人間への信頼や期待を可能にする「強者」の切望は、何よりもまずニーチェ自身のものである (ZGM: 1/12)。「強者」は、ニーチェにとって、「これまでの理想からわれわれを解放するとともに、これまでの理想から生じざるを得なかったもの、大なる吐き気、無への意志、ニヒリズムからもわれわれを解放する」存在である (ZGM: 2/24)。

道徳を否定するニーチェ自身の「無への意志＝ニヒリズム」は、生否定を否定する者の生否定、生に苦悩し倦み疲れた者を見る者の生への倦み疲れであり、そこで否定はメタ化し幕を高めていることが分かる。

このようなニーチェ自身のニヒリズムは、宗教的信仰を否定する科学的「真理への意志」が生否定であることの構造を示唆していると解釈できる。というのも、ニーチェ自身が「科学的良心」・「知的良心」を担っているからである。ニーチェは自己自身が「真理への意志」として「誠実」であろうとするからこそ、キリスト教道徳の自己欺瞞をいわば暴露的に指摘し得るのである¹⁸。

また、「無への意志」は過去やニーチェにとっての「今日」についてのみ言われているのではない。次の箇所では、「無への意志」は未来に生じる。

病者は健康な者にとって最大の危険である。強者たちにとっての災いは、最も強い者からではなく、最も弱い者たちから生じる。[……]恐れねばならないもの、比類なきほどに宿殃的に働くものは、大なる恐れではなく、人間に対する大なる吐き気であろう。同じく、人間に対する大なる同情（Mitleid）であろう。これら両者がいつの日か交合するとすれば、不可避免的にただちに何か不気味なものが世界にやって来るであろう。すなわち、人間の「最後の意志」、人間の無への意志、ニヒリズムが。（ZGM : 3/14, KSA : 5/368）

ここでは「無への意志＝ニヒリズム」は、接続法二式で述べられ、予告的に提示されている。すでに本論文の第一章第一節で確認した序言の箇所で、同情本能の内に「無」へ至ろうとする生否定的意志と「危険」が見出されるとともに、同情道徳がニヒリズムの「迂回路」ではないか、と考えられている（ZGM : Vorrede/5）。つまり、道徳はそれ自身「無への意志」であるが、またそこからさらに「無への意志」を生じさせもする。つまり、道徳と「無への意志」との関係は複雑である。道徳に関連してニヒリズムという「病」を見て取るニーチェは、序言ですでに、道徳を「結果としての道徳」と同時に「原因としての道徳」としても捉える必要性を説いている（ZGM : Vorrede/6）。

第二節 「無への意志」の三段階

宗教は生を否定的に評価しながらも、「神の国」の理想への過渡的段階として人間的生を動物から区別し特権化した。しかし、科学においては、認識対象すべてが平等に扱われねばならず、宗教において与えられた動物に対する人間の特権的地位は認められない。ゆえに、科学における生否定は宗教以上である、と言える。

ニーチェは近代の歴史記述を、「高度に禁欲的であるがしかし同時により高度にニヒリズム的である」と述べる（ZGM : 3/26）。なぜならば、「それはあらゆる目的論を拒否する。それはもはや何も「証明する」のを欲しない。[……]それは肯定しないのと同様に否定せず、それは確定し、「記述する」ことを旨とするからである（ibid.）。このような歴史観は、「何のため」という問いに対して答えを与えてくれず、一切は「無駄だ（Umsonst）！」・「無だ（Nada）！」となる、とニーチェは言う（ibid.）。

つまり、「真理」を追究すると、「真理」が「無い」という認識こそが「真理」である、という事態に突き当たる。したがって、「真理への意志」は、最終的には、「真理」が「無

い」ということも言えなくなる。「真理」が「無い」ならば、「真理」が「無い」という認識自体の「真理」性も「無い」からである。「真理」が「無い」という事態が「真理への意志」としての自己自身に跳ね返り、「真理」が「無い」という認識そのものを侵食する。あくまでも「真理への意志」である以上は「真」ではないことを言うてはならない。それゆえ、「真理への意志」は、究極的には、肯定することも否定することもできなくなる。ニーチェが言及しているニヒリストは以上のように理解することができる。

このように、科学的「真理への意志」が「誠実」であろうとすればするほど自己に対する否定的監視は強まる。そして、「真理」を見出すことができないがゆえに、生存の肯定はますます困難になる。

誠実であろうとすることは、「疾しい良心」の否定の働きが常に自己言及的に作用することに他ならない。それゆえニーチェは「誠実さ」の「自己超克」ということを考える。

できる限り厳密に問うて、キリスト教の神に勝利したのは本来何であったか？ 答えは私の著作『悦ばしき知識』第 357 節にある。すなわち、「それは、キリスト教の道徳性それ自身、ますます厳しく理解された誠実さの概念、科学的良心にまで、すなわちどんな犠牲をも厭わない知的清廉を求めるまでに翻訳され、昇華されたキリスト教的良心の聴罪師的繊細さである。[……] [……] かくして教義としてのキリスト教は自己の道徳によって没落したのであり、かくして今や道徳としてのキリスト教もまた没落せねばならない、——われわれはこの出来事の敷居の所に立っているのだ。キリスト教の誠実さは一つ一つ結論を引き出した後、最後には、その最強の結論を、すなわち自己自身に反対する結論を引き出す。しかしこのことが起こるのは、「あらゆる真理への意志は何を意味するか」という問いを立てる時である... [……] 真理への意志がこのように自己を意識するに至ると、それ以後——疑う余地のないところだが——道徳は没落する。(ZGM: 3/27, KSA: 5/409-410)

ここで、道徳としてのキリスト教は没落せ「ねばならない」と言われていることに注意しよう。ニーチェは、科学の宗教に対する否定を、宗教に由来する「誠実さ（真理への意志）」が宗教を否定し超え出る「自己超克」として捉えることによって、さらにそれを押し進める「誠実さ（真理への意志）」自身の必然的な「自己超克」を構想しているのである。そして、「自己超克」という必然的運動の契機となるのは、「無への意志」における自己否定の働きである。

ニーチェは、「神」が批判された今、「真理」も同じく生否定的であり形而上学的であるという議論を提示して見せることで、「真理」を絶対的価値と看做す「真理への意志」を問題にすることを可能にしている。つまり、ニーチェ自身においてはすでに「真理への

意志」が「真理への意志」自身を問題として意識している。ゆえに、ここでも、ニーチェ自身のニヒリズムとして述べられたメタ的生否定が生じることになる。

したがって、生否定のメタ化という観点から「真理への意志」は三つの段階に必然的に階層化すると解釈される。すなわち、「無への意志」の第一段階は宗教的「神」への信仰であり、第二段階は科学的「真理への意志」であり、第三段階は科学的「真理への意志」の自己批判である。

次章では、「真理への意志」の自己批判が、意志の維持不可能という「最大の危険」を孕みつつも、それを「超克」する可能性を持つという意味で両義的であることを明らかにする。

第四章 「無への意志」の両義性

第一節 「危険」と「希望」

「真理への意志」の自己批判による「道徳としてのキリスト教の没落」については、さらに次のように言われている。

真理への意志がこのように自己を意識するに至ると、それ以後——疑う余地のないところだが——道徳は没落する。これはすなわち、ヨーロッパの次の二世紀のためにとっておかれた百幕の大芝居、あらゆる芝居の中で最も恐ろしく最も問うに値する、そしてひょっとすると最も希望に満ちてもいるかもしれない芝居である... (ZGM: 3/27, KSA: 5/410-411)

「真理への意志」の自己批判は「無への意志」の階層化の最終段階である。したがって、この引用箇所から、「無への意志」の階層化は「危険」を意味すると同時に「希望」をも意味する可能性を持つことが分かる。ではその「危険」と「希望」とはそれぞれ何であろうか。「危険」と「希望」とは何かが明らかになることで、「無への意志」はその帰結において両義的であることが示されるだろう。

第二節 「自殺的二ヒリズム」

「無への意志」の最終段階である「真理への意志」の自己批判によって起こる「最も恐ろしい」事態とは、意志の維持不可能の「危険」に直面することである。なぜならば、本論文の第二章第三節で確認したように、禁欲的理想は「無への意志」であるが、「あくまでも一つの意志である」と言われ、これまで、禁欲的理想によって「自殺的二ヒリズムに対して扉が閉ざされた」と言われているからである（ZGM：3/28）。つまり、「神＝無＝真理」への意志をすべて否定し、生否定的意志をすら持たないならば、それまでかろうじて確保してきた意志の維持が不可能になると考えられる。それは自己否定がもはや自己肯定へと転換し得ない事態である。このような「危険」はさらに次のように解釈することができる。

「真理への意志」が「真理への意志」を単純に否定するならば、すなわち「真理を欲することは自己欺瞞だった」という判定は、「誠実さ」による判定であり、したがってそこでは自己言及パラドックスが生じている。つまり、「真理への意志」の自己批判が相対主義に至るならば、「嘘つきパラドックス」と同様の問題に陥り、「真理への意志」の自己批判という事柄自体が無意味になり、成り立たなくなる。そうすると、そもそもはじめから「何も欲しなければよかったのだ」ということになる。というのも、何かを欲することは、すべて何かを「真理」として欲することになってしまうからである。このようにして、「無への意志」の否定がメタ化された先には「無」を目標や理想として立てることすらもできない意志の維持の危機、すなわち「終末」が迫る。

したがって、「真理への意志」が「真理への意志」を批判した結果、「真理への意志」を否定するならば、それはもはや「無を欲することを欲する」のでもない「欲しないことを欲すること」であり、その帰結するところは意志の「自殺」であり「無」である。それこそが「終末」としての全くの「無」であり、ニーチェが言う生にとっての究極的「危険」であろう。

「無への意志」は自己否定を媒介にして必然的に階層化されるのであるから、「自殺的二ヒリズム」という意志の維持不可能の危険に直面するのは「不可避免的」である。

第三節 「真理への意志」の「自己止揚」とメタ的生肯定

本章第一節で確認したように、「道徳の没落」は「最も恐ろしく最も問うに値する、そしてひょっとすると最も希望に満ちてもいるかもしれない」と言われる（ZGM：3/27）。つまり、「真理への意志」の自己批判は、「無」の「危険」を克服する可能性を担保することでもある、と考えられる。

では、「無への意志＝ニヒリズム」の克服とはいかなる事態なのか。ニーチェは「無への意志＝ニヒリズム」を克服し得る「強者」を待ち望んでいる（ZGM：1/12, 2/24）。そして、その「強者」とは、生否定的な理想をこそ「良心」に「疾しく」感じる存在である（ZGM：2/24）。つまり、「無への意志＝ニヒリズム」の克服は「強者」による生否定の否定がもはやメタ的生否定ではなく、生の直接的肯定に転じることでであると解釈できる。「強者」はそれを「見る」「無への意志」に生への希望を生じさせる、とニーチェは言う（ZGM：1/12）。

したがって、「強者」によって「われわれ」がニヒリズムから解放される事態とは、「強者」の生肯定を「見る」者の生肯定であり、それはメタ的生肯定であることになる。

では、「真理への意志」の自己批判は、どのようにして直接的肯定とメタ的生肯定へと転換することができるのだろうか。

生否定を否定し得るのは「真理への意志」のみであり、まさに、否定するということところに「真理への意志」の本質がある。「真理への意志」でなければ「真理への意志」の「自己欺瞞」を見抜くことはできない。つまり、ニーチェは「真理への意志」が「真理への意志」を批判することで生じるパラドックスを回避するのではなく敢えて犯すことを主張していると解釈できる。それは、「自己超克」が「自己止揚」とも言い換えられていることから確認される。パラドックスを敢えて犯し「真理」/「虚偽」の二項対立的価値判断をはみ出すことで、「真理への意志」が維持されつつ変容していくのではないだろうか。つまり、「真理への意志」を放棄するのではなく、むしろ「真理への意志」をどこまでも徹底化させるのでなければならないのである。

そして、「強者」の存在が、それを「見る」者のメタ的生肯定となるためには、「強者」を「見る」者の意志が維持されていることが必要である。それは、「真理への意志」を放棄しない自覚的「無への意志」であると解釈できる。

以上より、「無への意志」はその階層化の帰結として、直接的生肯定の可能性を担保するとともに、生肯定のメタ化の働きともなり得ると結論できる。

終わりに

本論文は、「道徳の系譜学」における「無への意志」を「系譜学」に内在的に解明することを課題とした。要点は以下の通りである。「道徳の系譜学」は、「無」の「危険」の問題意識から始まり、「人間は欲しないことを欲するよりはむしろまだしも無を欲することを欲する」という言葉で終わるといふ議論の構成を踏まえると、「無への意志」の「系譜学」として解釈することができる（第一章）。そして、宗教的「神」および科学的「真理」概念が「無」と呼ばれ、「無への意志」は自己否定が自己肯定を意味する逆説性を表現する定式である（第二章）。その否定性を契機として、「無への意志」は必然的に階層化し、「自己超克」する（第三章）。「無への意志」の階層化の帰結として、「自殺的ニヒリズム」という究極的生否定の「危険」が「不可避的」となるが、それとともに「無への意志」がメタ的生肯定へと転換する可能性が生じると考えられる（第四章）。以上のように「無への意志」に着目しそれを「系譜学」的に解明することで、「無への意志」の階層性と両義性が明らかになった。

ここから、ニーチェの有名な「自己超克」の概念は、「無への意志」の自己言及的否定性を介した「無への意志」のメタ化のことであると解釈できる。また、「無への意志＝ニヒリズム」の克服のためには、「真理への意志」を放棄するのではなく、むしろ「真理への意志」を徹底化させ、パラドックスを喚起すること、そして、「強者」の直接的生肯定を肯定するというメタ的生肯定が考えられている、と解釈できる。このように、「無への意志」を「系譜学」的に考察することによって、ニヒリズムの基本構造が浮かび上がる。

「無への意志」の「系譜学」によって明らかとなったニヒリズムの基本構造は、ニーチェ哲学における「ニヒリズム」解明のために以下の点で重要となる。（１）ニヒリズムという「危険」の「不可避性」を理解することができることにより、ニーチェの「ニヒリズム」がどのような性格を持つのか、なぜ問題なのか明らかになる。（２）したがって「無への意志」の「系譜」を描き出す「道徳の系譜学」は、ニヒリズムについての根本的分析の出発点であり、新しい価値の創造のための予備学である¹⁹。（３）ニーチェは当時、ニヒリズムの根本的分析は「力への意志」概念によって行うつもりであったが、「力への意志」概念は歴史の具体的展開に根ざした「無への意志」概念と相互補完的な関係にあると推測される²⁰。

ニーチェの「ニヒリズム」をより広くかつより深く考察するためには『力への意志、あらゆる価値の価値転換の試み』の著作のために書かれた遺稿断片も含めて検討しなければならないが、遺稿断片の理解のためには『道徳の系譜学』における「無への意志」の階層性と両義性を踏まえる必要がある²¹。『道徳の系譜学』における「無への意志」にはニーチェ哲学における主要な術語としての位置づけが与えられねばならない。

凡例

○ニーチェのテキストからの引用および参照は以下の全集に従う。

Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke : Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, 2.Aufl., München : Deutscher Taschenbuch Verlag, Berlin/New York : Walter de Gruyter, 1988 (Neuausgabe, 1999)

○引用及び参照箇所は、以下の略号を用いて示した。なお、略号の後には章あるいは論文の番号と節番号を記し、必要に応じて KSA : の略号の後に上記全集の巻数とページ番号を添えた。

JGB Jenseits von Gut und Böse
ZGM Zur Genealogie der Moral

○ニーチェの遺稿については KSA の巻数の後に、慣例に従い、ノート番号・断片番号・書かれた時期を付して示した。

○原文における強調は下線で示し、筆者の本文における強調は傍点で表わした。

○なお、以下の邦訳および訳者による註も参照させていただいた。

信太正三訳『悦ばしき知識』（ニーチェ全集 8）、ちくま学芸文庫、1993 年

木場深定訳『善悪の彼岸』、岩波文庫、1970 年

木場深定訳『道徳の系譜』、岩波文庫、第二版、1964 年

秋山英夫・浅井真男訳『道徳の系譜；ヴァーグナーの場合；遺された著作（1889 年）：ニーチェ対ヴァーグナー』（ニーチェ全集第Ⅱ期第三巻）、白水社、1983 年

信太正三訳『善悪の彼岸 道徳の系譜』（ニーチェ全集 11）、ちくま学芸文庫、1993 年

注

¹ Wille zum Nichts や das Nichts の訳語については二説ある。一つには、Wille zum Nichts を「虚無への意志」、das Nichts を「虚無」とする訳である。この訳を採用する主な翻訳は、信太正三訳『善悪の彼岸 道徳の系譜』（ちくま学芸文庫版ニーチェ全集 11、1993 年）である。もう一つには、Wille zum Nichts を「無への意志」、das Nichts を「無」とする訳である。この訳を採用する主な翻訳は、木場深定訳『道徳の系譜』（岩波文庫、第二版、1964 年）、および秋山英夫・浅井真男訳『道徳の系譜；ヴァーグナーの場合；遺された著作（1889 年）：ニーチェ対ヴァーグナー』（白水社版ニーチェ全集第Ⅱ期第三巻、1983 年）である。本論文では、「無への意志」、「無」とする訳を採用する。その理由は、「虚無への意志」、「虚無」という言葉では、消極的・否定的ニュアンスが含まれるからである。本論文で詳しく論じるように、Wille zum Nichts や das Nichts には、消極的・否定的ニュアンスのみならず積極的・肯定的ニュアンスも含まれていると考えるべきである。それゆえ、Wille zum Nichts や das Nichts を消極的・否定的なものに限定してしまう「虚無への意志」や「虚無」という語は不適當であると考えられる。

² M.Heidegger, Nietzsches Wort »Gott ist tot«, in: *Holzwege*, Frankfurt am Main : Vittorio Klostermann, 1950, pp.193-247 (茅野良男、ハンス・ブロッカルト訳「ニーチェの言葉「神は死せり」」、『杣径・ハイデッガー全集 第 5 巻』、創文社、1988 年、235-296 頁）、および、西谷啓治『西谷啓治著作集 第八巻 ニヒリズム』（創文社、1986 年）、および氣多雅子『ニ

ヒリズムの思索』(創文社、1999年)を主なものとして参照。また、ニーチェのニヒリズムについての文章として最も有名な「標準状態であるニヒリズム。ニヒリズム。すなわち、目標が欠けている、「なぜ？」に対する答えが欠けている、ニヒリズムとは何を意味するか?——至高の諸価値が価値喪失しているということ」は、遺稿断片の一つである(KSA: 12/9[35], Herbst 1887)。

³ ハイデッガーもまた、ニーチェの「ニヒリズム」は常に従来の価値の喪失と新しい価値の定立という両義性を持つと考える(Heidegger, *op.cit.*, pp.206-207, 231(茅野良男、ハンス・ブロッカルト訳、前掲書、250、279頁))。

⁴ ハイデッガーは、ニーチェの「ニヒリズム」をヨーロッパの歴史の「内的論理」であり、根本的な動態を意味していると解釈する(Heidegger, *op.cit.*, pp.193-194, 206, etc.(茅野良男、ハンス・ブロッカルト訳、前掲書、236、249-250頁等))。また、ハイデッガーは「力への意志」の本質を考察することからニーチェの「ニヒリズム」も理解されるべきだと考える(Heidegger, *op.cit.*, p.214(茅野良男、ハンス・ブロッカルト訳、前掲書、259頁))。本論文は、ハイデッガーが「内的論理」という言葉で指したのと同じ事柄を考察する。ただし、本論文では、ハイデッガーとは異なり、「無への意志」を「系譜学」的に解明することによって、この問題を考察する。なぜならば、「力への意志」からニヒリズムを考察するためには、まず先に「無への意志」による考察を必要とすると、本論文では考えるからである。その根拠は、「力への意志」という概念はニーチェが問題とする事柄をすべてそこから説明しようとする根本的概念・無前提的テーゼであるのに対して、「無への意志」は「系譜学」においてニーチェの問題意識を表現しており、それゆえに、なぜニヒリズムを「力への意志」という概念によって独自の仕方でも根本的に分析しなければならないのかは、「無への意志」という概念から補完的に理解されねばならないと考えられるからである。

⁵ 本論文ではニーチェによるドイツ語原文の gut/böse を「善」/「悪」と訳し、第一論文でこれと対照される gut/schlecht を「よい」/「わるい」と訳している。なお、schlecht だけでなく böse も質や出来についての否定的評価の意味を持つが、schlechtの方が böse に比べて質の劣悪のニュアンスが前面に出ており、また schlecht は身分の低さを意味する用法も残している(相良守峯編『木村・相良独和辞典新訂』(博友社、1963年)参照)。

⁶ 序言で次のように要約されている。「それ [= 善悪という価値判断] はこれまで人間の生長を阻止したのかそれとも促進したのか? それ [= 善悪という価値判断] は生の窮境の・貧化の・退化の徴であるのか? それとも反対にその内には充実・力・生の意志・生の勇気・生の確信・生の未来が表われているのか?」(ZGM: Vorrede/3)。また、ZGM: Vorrede/6にも同様の記述がある。

⁷ 言及箇所については次のとおりである。「無への意志 (Wille zum Nichts)」は ZGM: 2/24, 3/14, 3/28、「無を欲する (das Nichts wollen)」は ZGM: 3/1, 3/28。また、「無 (das Nichts)」は ZGM: Vorrede/5, 1/6, 2/11, 3/1, 3/17, 3/25, (Nada というスペイン語で 3/26) である。なお、「無への意志」と同様の表現としては、「無への欲求 (Verlangen in's Nichts)」という語があり、この語の使用箇所は ZGM: 1/6, 2/21 である。

⁸ ここで言う「科学」とは原語で Wissenschaft であり、ニーチェは自然科学と人文科学の両方について言及している (ZGM: 3/24, 3/25, 3/26)。

⁹ 清水真木氏は、ニーチェの行為は「批判」ではないと主張するが、本論文はそれに与しない。清水氏の主張は、ニーチェは「弱者」の教化や改良を意図してはならず、したがっ

て「批判」という言葉は当たらないというものである（「ニーチェは健康な人間の作り方を教えるか」（『理想』第 684 号、理想社、2010 年、31-41 頁）参照）。しかし、「弱者」に対する「距離」のとり方についてはさておき、本論文の以下で述べるように、道徳についてのニーチェの鋭い暴露的洞察は、ある種の自己批判の側面を持つと考えられるのではない。そのように本論文は考え、敢えて「批判」という語を用いる。

¹⁰ 『道徳の系譜学』という書物の試みの意図をどのように理解するかについては、他の解釈として、例えば、須藤訓任「認識者の系譜学——「時代」という名の自己」（『思想』第 919 号、岩波書店、2000 年、73-96 頁）参照。須藤氏は、道徳という伝統の批判の方法論という観点から論じている。

¹¹ ニヒリズムという言葉やテーマそれ自体は、19 世紀はじめにすでに時代の意識として何らかの形で存在した。ニーチェに先立つ哲学的用例として、例えばヘーゲルの「信仰と知」（1802 年）でも「神の死」やニヒリズムについての言及がある。（廣松渉ほか編『岩波哲学・思想事典』（岩波書店、1998 年）の「ニヒリズム」の項、および秋富克哉「ニーチェにおける「神の死」の解釈をめぐって」（『理想』第 680 号、理想社、2008 年、85-97 頁）参照）。ニーチェも、ニヒリズムという語を、ある程度の市民権をすでに得ているものとして使っている。

¹² ニーチェは最終的には『力への意志』という標題の書物を断念したという見解が有力である。しかし、「あらゆる価値の価値転換」というモチーフは維持されていたと考えられている（大石紀一郎ほか編『ニーチェ事典』（弘文堂、1995 年）の大石紀一郎氏による「ニーチェ年譜」および三島憲一氏による「さまざまなニーチェ全集について」参照）。『力への意志』の標題が計画されていたことは、本文中に引用した通り、『道徳の系譜学』の中でも記されているのであるから、『道徳の系譜学』以後に計画の何らかの変更があったと考えられる。

¹³ ニーチェの宗教に対する一般的定式については、以下の箇所を参照。「[……] 非常に繊細に、非常に巧みに、それも非常に南国的な巧みさを持って、とりわけそれ [=キリスト教] は、生理的に抑止された者たちの深い沈鬱、鉛のような疲労 (Ermüdung)、暗黒の悲哀はどのような情念刺激剤でもってすれば少なくとも一時的に打ち負かすことができるかということを知った。というのも、一般的に (allgemein) 言って、あらゆる大宗教において第一に重要であったのは一種の流行病にまでなった疲労 (Müdigkeit) と重苦しさや戦うことであったからである。[……] この生理学的阻害感、生理学的な知識の欠如からして、生理学的なものとしては意識されず、それゆえその「原因」やまたその治療法は心理学的＝道徳的にのみ求められ、試みられ得る。（——すなわち、これが、概して一つの「宗教」と呼ばれるものに対する私の最も一般的な (allgemeinst) 定式である）」(ZGM : 3/17, KSA : 5/377-378)。

¹⁴ ニーチェは、キリスト教における「神」との神秘的合一や仏教やバラモン教における脱我の理想的境地がいずれも禁欲的修行によって達成されることに注目し、「神」との合一や「無」への没入を禁欲における催眠感情として捉える (ZGM : 3/17)。

¹⁵ ニーチェはこのような仕方の自己肯定のメカニズムを説明している。それによれば、生の最も基礎的条件を支配することは「弱者」の「力への意志」の発揮となり (ZGM : 3/11)、生理的な繁栄増大ではなく損害や縮減をこそ悦ぶことで「弱者」の「復讐」が果たされる (ibid.)。また、「疾しい良心」が自己の苦悩の原因を自己自身に求めることで、「負い目」の感情が強く自覚され、それによって他の感情が排除されて苦痛が感じられなくなり、生

に対する「倦み疲れ」から回復することができる（ZGM：3/20）。

¹⁶ 「逆説」という言葉については、ZGM：3/11, 3/16 および ZGM：2/16, 2/21 参照。

¹⁷ 「このような生に敵対的な種を繰り返し生長させ繁茂させるのは第一級の必要であらねばならない。自己矛盾のそのような類型が絶滅しないのは、おそらくは生自身の関心であらねばならない」（ZGM：3/11, KSA：5/363）。このように、ニーチェは、生が否定されるといふ事実があるということは、それがその生にとって第一級の必要事だからだと推測する。

¹⁸ ニーチェによれば、「善」なる「弱者」が「悪」なる「強者」の「力意志（Machtwille）」の発現を否定する「正義」の内に、「ルサンチマン（Ressentiment）」と呼ばれる憎悪や復讐欲の蓄積があり（ZGM：1/10, 2/11, 3/14）、しかも、そのルサンチマンは、「弱者」自身の「力意志（Machtwille）」・「力への意志（Wille zur Macht）」によるものである（ZGM：3/11, 3/14, 3/18）。自己自身の「力意志」を隠蔽しつつ「強者」の「力意志」を否定することは「嘘」や「偽善」である。それゆえ、ニーチェは、今や道徳においてはその嘘が嘘として自覚されていない、と自己欺瞞を非難し（ZGM：3/14, 3/19）、それを「不正直な嘘」と呼ぶ（ZGM：3/19）。

¹⁹ ニーチェによれば、道徳的諸価値は、さらに、文献学や歴史学、生理学や医学などあらゆる科学によって様々な観点から吟味されねばならない（ZGM：1/註）。『道徳の系譜学』という書は、「道徳史の研究を促進する」ための「一つの強力なきっかけを与えるのに役立つ」ものとして位置づけられている（ibid.）。そして、「あらゆる科学は今や哲学者の未来の課題のための準備をしなければならない。この課題とは、哲学者は価値の問題を解決しなければならないということ、価値の地位序列を決定しなければならないということであると解される」と言われる（ibid.）。

²⁰ 見通しを述べておこなうならば、「無への意志」の歴史的階層構造は「力への意志」の具体的現象であり、「力への意志」は、生存の肯定を「無への意志」とは別の側面から術語化している、と考えられる。例えば、ニヒリズムのより根本的分析を行う書である『力への意志、あらゆる価値の価値転換の試み』の計画中のメモには、次のようなものがある。「私は欺かれたくない」あるいは「私は欺きたくない」あるいは「私は自分を納得させ確固たるものになりたい」としての、力への意志の形式としての「真理への意志」。「正義への意志」・「美への意志」・「援助への意志」、これらすべては力への意志。何ら善意ではない」（KSA：11/39[13], August-September 1885）。

²¹ 例えば、以下の遺稿のテキストは、ニヒリズムの「両義性」を「力（Macht）」によって説明しているが、ここでニーチェが「力」によって特徴づけたニヒリズムは、本論文によって明らかとなった「無への意志」の両義性によって説明することができるだろう。「ニヒリズムとは何を意味するか？——至高の諸価値が価値喪失しているということ。それ〔＝ニヒリズム〕は両義的である。すなわち、A)精神の持つ高められた力（Macht）の徴としてのニヒリズム、すなわち能動的ニヒリズムとしての。〔……〕B)精神の力（Macht）の下降および後退としてのニヒリズム。すなわち受動的ニヒリズム。すなわち弱さの徴としての〔……〕」（KSA：12/9[35], Herbst 1887）。これについては、別の機会に詳論したい。